

蔣士銓『臨川夢』における湯頭祖像

王, 毓雯
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9637>

出版情報：中国文学論集. 28, pp. 68-84, 1999-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

蔣士銓『臨川夢』における湯頭祖像

王 毓 雯

はじめに

蔣士銓（字は心餘・茗生、號は藏園・定甫、一七二五～一七八五）は江西省鉛山県出身で、清乾隆時代の人。袁枚・趙翼と並び、江右三大家と称されている。三十三歳（乾隆二十二年、一七五七）進士に及第し、庶吉士に選ばれた。三十六歳の時に、武英殿纂修官となった。三十八歳の時には、順天郷試同考官となり、さらに『續文獻通考』纂修官に転じた。その後、五十七歳（乾隆四十六年、一七八一）に、再び中央へ戻って國史館纂修官となる。

蔣士銓は袁枚・趙翼と共に、性情を重視した詩人の一人として知られている。しかし、一方で、彼の戯曲作品が社会的効用を重視し、道徳による教化を目的としていたことについては、あまり知られていない。蔣士銓のいう社会的効用・教化は、彼の戯曲作品『藏園九種曲』中の『冬青樹』『桂林霜』に表れた忠君忠勤思想に最も顕著に表れている。同様に、九種曲中の『臨川夢』に描き出された湯頭祖の像からもそのことは窺われる。

『臨川夢』の主人公湯頭祖（一五五〇～一六一六）は江西省臨川県の出身であり、明嘉靖・萬曆時代の最も著名な劇作家である。即ち、蔣士銓にとっては同郷の大先輩となる。従来『臨川夢』についての論稿は、湯頭祖の像が専ら彼の忠孝の姿に重きを置いて描かれていると論じるのみであり、この「忠孝」思想の表れが一体何を背景としているのか、さらに忠臣の強調は一体何を意味するのかについて明らかにされることはなかった。そこで本稿では、湯頭祖と蔣士銓のそれぞれの時代の生き方の比較を通して、二人の類似点を探り、また、蔣士銓の『臨川夢』

の作品中に於いて、湯頭祖の事績がどのように扱われたのかについて検討を行い、その創作動機について考察したい。同時に、乾隆治下の教化主義的戯曲が如何なるものであったかについても考察を進めたい。

一

『臨川夢』は乾隆三十九（一七七四）年に作られ、湯頭祖の生涯をもとに、湯氏の『牡丹亭』傳奇に心をひかれて死んだ婁江の俞二娘との事を描いた作品である。ところで、『臨川夢』について張敬氏と青木正兒氏に次のような指摘がある。即ち、張氏は「作者（蔣士銓：著者注）は戯曲を作る旨は仁義を伝え、節烈を歌うことにある。…故に、臨川の文才を歌うより、臨川の忠孝及び権貴に阿らないことを表すことの方が重要なのである。」¹⁾と、また青木氏は「人物の描写に就きて、剛直廉潔な官僚として頭祖の面目は鮮明に描き出されたれど、其本来たる磊落不羈なる文豪の風格は却て寫してまだ盡ざるの憾み有り、是れ余の最も慊らざる一大缺陷なり。」と述べる。²⁾この『臨川夢』に対する両者の評価は、いずれも作品に描き出された湯頭祖の像が、「文才」や「文豪」を歌うよりも忠孝のイメージを表すということについて指摘する。では、なぜ蔣士銓は、この様に忠孝完人の像に重点を置いて戯曲を描くのであろうか。この疑問を解明するためには、明・清時代といった相違する時代を生きた二人が、當時にあって如何なる境遇にいたのかを明らかにする必要がある。以下には、湯頭祖と蔣士銓の二人の官歴、そして辞職後の生活などに触れ、それぞれの間にある具体的な類似点について分析したい。そういった作業を行うことによって、蔣士銓が自己の境遇をベースとして作った『臨川夢』の創作意図を明確にすることができよう。

まず両者は、どのような思想・信念を持って、自己の生を営んでいたものであろうか。それについて、湯頭祖の場合、明の鄒迪光の「臨川湯先生傳」に、「貧乏な者はこれを助け、貧富に関わらず。」³⁾とあるように、彼は自分自身のためよりも他人の危難に奔走することが多かったことが分かる。

つづいて、蔣士銓の場合を見てみよう。『乾隆南昌縣志』卷二十五に、

士銓性純粹、家無餘儲、而急人之患若身受然。耿介自守、雖權貴不能干以私。

蔣士銓『臨川夢』における湯頭祖像（主）

士銓は性純粹、家に餘儲なし、而して人の患苦を急ぎすくうこと、身にこれを受くるがごとし。耿介自守し、権貴といえども干するに私を以てする能わず。

とある。そこには、志を持つて人を助けることを好む蔣士銓の姿がある。

これらの資料によれば、二人とも貧しき者を助け、危難を救うことを自分のことより重んじる義侠の人であったことが分かる。自ら人を助けることに志を持つとは、とくに儒家の「經世濟民」の政治思想と関係があらう。

つづいて、二人の官途についてみてみよう。湯頭祖は二十一歳（隆慶四年、一七五〇）で挙人となったが、進士となったのはようやく三十四歳に至ってからである。その原因について『明史』卷二百三十「湯頭祖傳」に、

張居正欲其子及第、羅海内名士以張之、聞顯祖與沈懋學名、命諸延致、顯祖謝弗往、懋學與居正子嗣修偕及第。張居正、その子を及第せしめんとし、海内の名士を羅し、以てこれに張る。頭祖と沈懋學の名を聞き、これを延致に命ずるも、頭祖謝して往かず、懋學遂に居正子嗣修と偕に及第す。

とあり、張居正の命令を拒否したために合格できなかったことを述べる。その結果、彼は萬曆十一（一五八三）年、すなわち張居正が死んだ二年後によりやく及第し、進士となった。

一方、蔣士銓は乾隆十二（一七四七）年、二十三歳で挙人となり、その時に内閣中書を授けられたが、進士に及第したのはそれから更に十年後の三十三歳の時であった。湯頭祖と同様、順調に進士に及第したわけではなかった。彼は若い時に挙人となったものの、「耿介自守し、権貴といえども干するに私を以てする能わず」というような性格のため、三十三歳になって始めて科挙に及第することができた。両者とも権貴に取り入ることを嫌ったために、辛酸を嘗めることになったのである。

では、起家後の二人の官場での様子は如何だったのであろうか。まず湯頭祖であるが、進士となった彼の官途は、これ以後も順調に昇進して行ったわけではなく、当時の宰相の申時行の招きを断ったために、南京太常博士という低い官位を授けられた。そして萬曆十六（一五八八）年、南京詹事主簿に移り、一年後には南京禮部祭司主事に任じられた。いずれも閑職である。彼は南京に滞在している間に、その余暇を利用して近くの名勝を見物するなど、自己の見識を広げた。また著述に従事して、戯曲『牡丹亭』を創作し始めた。萬曆十九（一五九一）年になると、

「星變」に關して皇帝に対して忠誠心あふれる「論輔臣科臣疏」を上呈した。しかしこれはかえって皇帝の怒りを招き、ついには広東省徐聞知県に左遷されることになった。瘴氣に満ちた徐聞県に赴任することは、当時は非常に死の危険があることと目されていたが、彼自身はそのことを氣にかけず赴任の途につく。広東での職務を無事に終え、萬曆二十六（一五九八）年には浙江省遂昌知県に転じた。そこでの治績について、「臨川湯先生傳」に、

轉遂昌令。相與去鉗劓、罷桁楊、減科條、省期會、一意拊摩噢咻、乳哺而翼覆之。用得民和、日進青矜子秀、揚推論議、質義斧藻、切劘之為就兢、一時醇吏聲、為兩浙之冠。

遂昌令に転ず。相與に鉗劓を去り、桁楊を罷め、科条を減じ、期會を省き、一意に噢咻するを拊摩し、乳哺してこれを翼覆し、用て民の和を得たり。日々青矜子秀を進め、揚推論議し、質義斧藻、これを切劘すること、就兢たり。一時醇吏の聲、兩浙に冠たり。

とあつて、彼が遂昌県に於いて訴訟や庶務のことに真面目に取り組み、よく解決したことを述べ、彼を良吏として讃えている。また「臨川湯先生傳」に、

而公以僦儻夷易、不能眷鞞鞞、睨長吏色而得其便。又以礦稅事多所踈盪。計偕之日、便向吏部堂告歸。雖主爵留之、典選留之、御史大夫留之、而公浩然長往、神武之冠竟不可挽矣。

而れども公は僦儻夷易なるを以て、眷鞞鞞（袂をからげ、臂あてをつけて）、長吏の色を睨てその便を得る能わず。又礦稅の事踈盪する所多きを以て、計偕の日、便ち吏部堂に向かつて歸を告ぐ。主爵これを留め、典選これを留め、御史大夫これを留むと雖も、而も公は浩然として長往し、神武の冠竟に挽く可からず。

と記されている通り、彼の権貴に阿らない堅い氣節が窺われる。その結果、とうとう四十九歳の時に、彼は官職を捨てて故郷に帰ってしまうのである。

一方、蔣士銓については、『同治鉛山縣志』卷十五、「人物儒林傳」に、

當是時、士銓名震京師、名公卿爭以面識為快。有顯宦某欲羅致之、士銓意不屑。自以方枘入圓鑿、恐不合且得禍。鍾太安人亦不樂俯仰黃塵中、遂奉命南旋。

この時に当たり、士銓の名京師を震わし、名公卿、争いて面識するを以て快となす。顯宦某あり、これを羅致

蔣士銓『臨川夢』における湯頭祖像（王）

せんと欲するも、士銓意に屑しとせず。自ら方枘を以て円鑿に入るがごとく、合わずかつ禍を得るを恐る。鍾太安人もまた黄塵の中に俯仰するを樂しまず、遂に命を奉じて南旋す。

とある。蔣士銓は都にいた八年間に、その文才は広く知られるところとなったものの、権貴に取り入ることを軽蔑し、その結果、世に重んぜられないと痛感したために、結局のところ母親鍾太安人の話を聞いて、辞職して故郷へ帰ったのである。

蔣士銓は一生、政治権力に直接には関わらない史官（武英殿纂修官・續文獻通考纂修官・國史館纂修官）として務めていた。しかし、自らは権貴に阿らない剛直な官僚に憧れ、「世を經め民を濟う」という政治理想を持っていた。だからこそ戯曲作品に湯頭祖の政治活動を取り入れて描くことによって、自分の果たせなかった政治的理想を表現しようとしたのである。

最後に、辞職後の生活について両者を比べてみよう。湯頭祖は萬曆二十六（一五九八）年、官職を捨てて、故郷の江西省臨川県に帰った。老後の生活を送りながら、時には詩・詞・曲などの著作に専念した。戯曲への関心を常に持っていた湯頭祖は、この時期『玉茗堂四夢』（湯頭祖の戯曲作品）の内、『牡丹亭還魂記』・『邯鄲記』・『南柯記』といった多くの優れた作品を完成させた。

蔣士銓の場合、乾隆二十九（一七六四）年、四十歳の時、辞職した。袁枚と一緒に金陵に住み、詩を作ったり、詠歌し合ったりした。また彼の『藏園九種曲』には、辞職後の作品が七篇ある。それは『桂林霜』（乾隆三十六年）、『四絃秋』（乾隆三十七年）、『雪中人』（乾隆三十九年）、『香祖樓』（乾隆三十九年）、『臨川夢』（乾隆三十九年）、『第二碑』（乾隆四十一年）、『冬青樹』（乾隆四十六年）である。特に蔣士銓は乾隆十九（一七五四）年に『空谷香』という作品を完成した後、十七年の長いブランクを経て、乾隆三十六（一七七二）年に再び戯曲を創作し始め、七つの作品を完成させた。二人とも官職を辞してからの戯曲創作を生涯の中心に置いていたことが分かる。

以上縷述したことから、湯頭祖と蔣士銓の二人について、その生き方、官歴、そして、辞職後の生活などの面をいくつかの類似点が明らかになった。即ち、二人とも志節を堅く持った文人であり、そのため権貴に取り入ることを軽蔑していた。従ってこのような性格は政治に向かず、自然と彼らの官途に大きな影響を与えることとなった。

そして辞職後の生活では、二人とも詩・文・曲などの著作に専念し、戯曲への関心から様々な優れた作品を完成させたのである。そのためか、蔣士銓は湯頭祖がただの読書人、文人であっただけでなく、自分と同じく、儒者として「世を経め民を濟う」心を持ち、任侠を好んだ人であつたらうと推察している。しかしここで注意しなければいけないことは、蔣士銓の『臨川夢』〔提綱〕に、

【蝶戀花】氣節如山搖不動、玉茗堂中、説透痴人夢。鐵板銅弦隨手弄。婁江有個人知重。喚做詞人心骨痛、史策彈文、後世誰能誦。醒眼觀場當自訟、古來才大難為用。

氣節山の如く、揺れても動かず。玉茗堂中に、痴人の夢を説き尽くす。鉄板、銅弦、手に随い弄ぶ。婁江のあつる人、人の重きを知る。喚んで詞人となせば心骨痛む。史策、彈文、後世の誰かよく誦せん。醒眼の觀場は當に自ら訟むべし。古來、才の大なるは、用いられ難し。

と述べられているように、社会の世論は湯頭祖のことを厳しく批判したということである。こういった批判は作者の創作動機とは無関係とは言えない。よって次の章では、こういった社会世論を考察し、『臨川夢』に湯頭祖の事績がどう扱われているかについて分析していきたい。

二

蔣士銓にとって、自己の境遇と多くの共通性を持つ郷土の大先輩湯頭祖については、無上の親しみと尊敬を感じると同時に、彼の心情をよく理解できたのであろう、自分と同じ詞人としての湯頭祖が「輕薄文人」と呼ばれることに対し、「喚んで詞人となせば心骨痛む」（『臨川夢』〔提綱〕）と沈痛な気持ちで嘆いている。

では、清に入って、当時の人々ほどのように湯頭祖のことを評価しているのであろうか。これについて、王宏『山志』卷四「傳奇」に、

臨川牡丹亭、膾炙人口、然意侵婁江、亦涉輕薄。

臨川の『牡丹亭』、人口に膾炙するも、然るに意は婁江（婁江二娘のこと：著者注）を侵り、また輕薄に涉

蔣士銓『臨川夢』における湯頭祖像（王）

る。

とあり、湯頭祖が作った『牡丹亭還魂記』は軽薄な作品のため、罪を責めて罰すべきだと記されている。また楊恩壽『詞餘叢話』卷三に、

嘗見感應篇注、「有人冥者、見湯若士身荷鐵枷、人間演牡丹亭一日、則答二十。」

嘗つて感應篇の注を見るに、「冥に入る者あり、湯若士の、身に鐵枷を荷い、人間に牡丹亭を演じること一日なれば、則ち答二十となるを見る。」とあり。

と述べ、彼が地獄におちてしまい、天罰を受けていることを記す。また顧公燮『消夏閑記摘抄』卷下「陳眉公學問人品」にも、湯頭祖が『牡丹亭還魂記』を作つたため、阿鼻地獄におちいり、輪廻できないことを記している。周知の如く、明清時代に入って、三教合一した民間宗教が庶民の間に広がり、民間では因果応報や勸善懲惡といった思想が発達するようになった。こういつた因果応報の世論もこの民間宗教の広がりや密接な関わりを持つていたことが分かる。更に時代が下り、清に入って民間宗教が広く深く根をおろすにつれて、「淫詞」を作ると考えられた小説や戯曲作家たちは社会秩序や道徳・風俗を乱すものと目され、死後地獄に落ちて苦しみを味わう羽目に陥ってしまった話が数多く伝えられている。民衆は、『牡丹亭』を作つた湯頭祖も死後の地獄で苦しめられていると考えていた。恐らくそのためであろう、蔣士銓は先あげた『臨川夢』「提綱」に於いて、湯頭祖が軽薄な詞人と呼ばれ、彼の政治的な能力をないがしろにしてしまい、世に重んぜられない境遇に心を痛め、「古来、才の大なるものは用いられ難し」と慨嘆するのである。また彼は、第十七齣「集夢」に於いて、湯頭祖の作『紫釵記』の主人公霍小玉を通して次のように詠んでいる。

他平生罪孽這詞章。因他有此口過、是以畢世沈淪、不能大用。

彼の平生の罪孽はこの詞章のみ。他にこの口過あるにより、是を以つて畢世沈淪し、大用さるる能わず。

これは、まさに湯頭祖が社会から受けた侮蔑に対する蔣士銓自身の嘆きである。この嘆きこそ、蔣士銓がこの戯曲作品を創作する時の原動力となつたのではないだろうか。以上述べてきたように、『臨川夢』の創作意図は、蔣士銓と湯頭祖自身の境遇に深い関わりがあるほか、当時の社会の人々の戯曲作家に対する考え方にも深く関係する

であろう。

続いて、蔣士銓の『臨川夢』の作品中で、湯頭祖の事績がどのように扱われているかについて考察してみよう。

この作品は、まず湯頭祖が張居正の依頼を拒否したことから始まる。『臨川夢』の第一齣、張居正が、自分の子張嗣修を進士に及第させようとして、湯頭祖に助けを求めることについて述べた「拒弋」に、

公相自寶其權、匹夫獨守其志、我湯頭祖即使終身窮困而死、斷斷不羨那鬱輪袍之富貴。

公相みずから其の權を寶とし、匹夫はただ其の志を守るのみ。我、湯頭祖はたとえ終身窮困して死すとも、斷斷この鬱輪袍の富貴を羨やまず。

と記されている。続いて、

(外)【簇御林】將名器托蹇修。市恩門不覺羞。只堪籠絡人中狗、誰肯逐蜣螂臭。(末)在江陵、方謂天下之人、無不可羅致、豈知公車之上、有一措大、直以草芥視之耶。世悠悠、甘心貧賤、不願識荆州。

(外)【簇御林】名器を蹇修に托す。恩門を売つても恥とは感じない。ただつまらぬ人間をまるめこんで、誰があえてくそむしに従おうか。(末)江陵は天下の人すべてを招き寄せると言うが、どうして知ろう、公車の上にいる一人の貧乏な読書人が、専ら野人の眼で、この招きを見ていることを。この野人は、世間に悠々とし、貧乏に甘んじて荆州を知るを願わない。

と述べる。この齣は、前述のように、科擧にまつわるエピソードをもとに作られているが、蔣士銓は湯氏の親友の李道甫(外)と梅國禎(末)との話しを通して、湯頭祖が剛毅正直、権貴に阿らないという性格を際立たせようとしたことが分かる。そして、第七齣、湯頭祖が当時の悪政を論じて「論輔臣科臣疏」の文章の下書きを作ることについて述べた「抗疏」において、

(生)臣為皇上可惜者有四。【煞尾】荆棘盈庭、私室栽桃李。無人品、喪臣節、玷朝儀。陛下經營天下二十年矣。前十年之政、張居正剛而多欲、以群私人囂然壞之、後十年之政、申時行柔而多欲。又以群私人囂然壞之。

(生)私は皇帝のために惜しむべきことが四つある。【煞尾】それは荆棘が庭に満ちているのに、私室に桃李を植えること(私腹を肥やすこと：著者注)。人品が無いこと、臣の志節を失うこと、朝儀を汚すことである。

蔣士銓『臨川夢』における湯頭祖像(王)

陛下は天下を二十年治めて来られた。前の十年の政治は張居正が剛強で欲が多く、囂然として政を壊した。後の十年の政治は申時行が優柔で欲が多く、また私人を集め、囂然として政を壊した。

と描写する。ここで蔣士銓は、湯頭祖の「論輔臣科臣疏」¹²文を戯曲作品中に取り込み、この齣を通して明の張居正・申時行らの行為を激しく批判することで、湯頭祖の政治活動を十分に評価する。ここに忠臣と奸臣との争いを取りわけ際立たせ、湯頭祖の忠誠と耿耿たる志節を描きだそうとする蔣士銓の意図が明示されている。

更に蔣士銓は、湯頭祖が赴任する各地での治績を描いている。まず第九齣、湯頭祖が広東省徐聞県から榮転して遂昌県の県令に赴任する時、徐聞県の庶民らが、彼の離任を惜しむことについて述べた「送尉」には、次のようにある。

【仙呂入雙調】「孝南歌」恩官去、魂暗銷、耆民白頭珠淚拋。家室免逋逃、閭閻無盜賊、升遷太早。……（生瀧涙介）父老們、此乃官程所限不能再留。自今以後、各自願養壽命、約束子孫做好人、莫被官司筆撻、便不負我多年愛惜之意、去罷。

【孝南歌】良い官吏が去り、魂は密かに失われ、老人たちは涙をぼろぼろ流す。家族は故郷を離れた流民になるのを免れ、庶民には盜賊がない。湯爺の榮転は早すぎた。……（生は涙を流すしぐさ）長老たちよ、これは私の赴任する期限が切れて、もう留まるわけにはいかないのです。これから、各自養生ください。子孫をよい人間に育てて、官吏に鞭でたたかれる目に遭わせないようにして、私のいとおしむ気持ちに背かないでください。どうぞお帰りを。

ここには、湯頭祖が徐聞県を離れようとする時に、住民が見送りに来た場面が描かれている。また遂昌県にはそもそも虎が多かった。このことは湯頭祖の心を痛め、絶滅を期して虎狩りを行なう一方、城隍祠に詣で、城の神々に報告して滅虎祠を建て、できる限り虎を消滅しようとする。その結果、虎が減少したという。蔣士銓は第十一齣「宦成」において、とりわけ力を入れてこのエピソードを描写し、

（生）【黃鶯兒】官如欠清、神如欠靈、陰陽尸位奇災應。

（生）【黃鶯兒】官がもし清廉さを欠き、神がもし靈験を欠けば、陰陽の官はただ職位に在るだけであり、思

わぬ災禍がおとずれよう。

と記す。そのため、蔣士銓は「宦成」齣の最後の場面に、

(城隍領鬼兵繞場下、獵戸扛虎上) 稟老爺、小人們用強兵毒矢、正在射虎、忽見山下黑氣中、有無數神兵相助。遂將雄虎射死、送來驗看。(生) 妙極。城隍可云盡職矣。

(城隍は鬼兵をつれて舞台を回って退場する。狩り人が虎を背負って登場する) 老爺に申し上げます。私たちは強い弓、毒の塗った矢で、ちょうど虎を狩猟している時、突然山の下の黒い気(霧)の中から、多くの神兵があらわれ、助けにきました。そうして雄の虎を射殺し、それをここにお持ちしましたので、ご検分ください。(生) すばらしい、城隍は職責を果たしたと言えよう。

と、湯頭祖が遂昌県令として善政を行うために、城隍神さえも神兵を率いて助けに来たという故事を描いている。彼は官途が思う通りにうまく行かなかったにもかかわらず、任地の広東省の徐聞県や浙江省の遂昌県において、花県を目標として力を尽くして治めた。その結果「一時醇吏の声、兩浙に冠たり」と、非常に良い評判を博したという。これらの故事を元に、蔣士銓は、城隍神が顕霊をおこし、虎の一掃を助けに来たというエピソードを作品にいい、湯頭祖の清廉潔白の治績を際立たせようとしていることが分かる。

この二齣の中で、蔣士銓は湯頭祖の「親政愛民」、つまり「良吏」という人間像を描き出す。このことを通して、自分の一生叶わない願望―実現できない政治理想を表現していることがわかる。つまり幼い頃から儒家教育を十分に受け、その思想がすでに心の奥にしっかりと根をおろしている蔣士銓にとって、湯頭祖が抱いた「世を経民を済う」理想は伝統の精神たる儒家の道であると思えたようである。そこで、蔣士銓はさらに第十七齣「集夢」において、

【懶畫眉】主持功過有文昌、文到無邪翰墨香。(貼) 因他忠孝無虧、循良自矢、所以壽考康寧、不遭禍害。…終不似輕薄文人取禍殃。

【懶畫眉】功過を取り締まるには文昌が必要であり、文章が邪でなければ美しい。(貼) 彼が忠孝共に欠かず、自ら循良を誓うため、長寿で安らかで、禍に遭わないのだ。…輕薄の文人が禍を引き起こすようにはならない。

蔣士銓『臨川夢』における湯頭祖像(王)

と詠み、湯頭祖はただの詞人でもなく、軽薄の文人でもない、そのため長生きができて患いのないことを強く主張している。また湯頭祖が世間から受けた不平への嘆きは、同時にそれは蔣士銓自身の境遇でもあった。そのため、『臨川夢』の自序には、

嗚呼、臨川、一生大節、不遜權貴、遞爲執政所抑。一官潦倒、里居二十年、白首事親、哀毀而卒、是忠孝完人。嗚呼、臨川、一生大節にして権貴にちかよらず、ついに執政の抑うるところとなる。一官潦倒し、里に居ること二十年、白首して親につかえ、哀毀して卒す、これ忠孝の完人なり。

と記している。一生詞人で終わりたくない蔣士銓と、ここに描き出された湯頭祖とは、二人とも単なる詞人にとどまらず、堂々たる偉丈夫である点が一致する。ここでは湯頭祖の豊かな文学的才能が歌われているのではない。『臨川夢』を通して表現された忠孝完人の湯頭祖のイメージは、恐らく作者が胸中に描き出した理想の豪俠の姿であらうと思われる。

三

『臨川夢』における湯頭祖の「忠孝完人」の像について、注意を払わなければならないことは、当時の文学環境、特に蔣士銓の詩の創作とも密接な関係があるということである。特に乾隆期になってから、文人作家は詩文創作の手法で戯曲を作るようになった。蔣士銓は詩の創作にあたり、性情を尊重することを強調している。例えば『忠雅堂詩集』巻十三「文字」には、

文章本性情、不在面目同。文章は性情を本とし、面目と同じにあらず。

君子各有真、流露字句中。君子各々真あり、字句中に流露す。

氣質出天稟、旨趣根心胸。氣質は天稟より出で、旨趣は心胸を根とす。

と述べる。ここで彼は、詩とは人間の真の性情を表すもので、詩の本になるのは性情であると主張する。しかも彼がいう性情とは、「忠孝義烈の心、溫柔敦厚の旨」に帰すべきものである。また彼は「詩、上は道德に通じ、下は

礼義に止まる。⁽¹⁹⁾」といい、「詩の用たるは、之を微にしては、以て鬼神を格とし、天祖を享べし、之を顯にしては、以て風俗を移し、人倫を厚くすべし。雅頌所を得、人心和平せば、すなわち天地、道、通ず。」と述べている。これらの資料を見れば、詩文の創作に際して、その社会的効用を重視する蔣士銓の態度が示されている。彼は常に詩の効用を念頭に置き、忠孝節烈といったものを詩に詠んでいた。周知の如く、十八世紀の文壇にもはやされた文学観は「宗經」「載道」である。乾隆帝は『唐宋詩醇』（乾隆十五年、一七五〇）を編纂させ、そのことよって「忠愛之志」「溫柔和平共處之意」を鼓吹し、詩歌の創作の仕方と批判の標準を制定したが、中でも特に重視したのは溫柔敦厚の思想であった。では、この時代にいう「溫柔敦厚」とは如何なる意味を持つのであろうか。そのことについて、以下に検討してみたい。

『禮記經解篇』に、

子曰、入其國、其教可知也。其為人也、溫柔敦厚而不可愚、則深於詩者也。

子曰く、その國に入り、その教を知る可きなり。その人となりや、溫柔敦厚なるは詩の教えなり、その人となりや、溫柔敦厚にして愚かならざるは、すなわち詩に深き者なり。

と述べている。この言葉は聖人孔子の言葉として記されている。故に甚だ大きな影響を後世に与えた。清初において「溫柔敦厚詩教也」が強く意識された原因は、それが文学に対する儒教の根本的な精神の現れであると考えられたからであった。人々は、永遠の平和は、儒教体勢を確立して強固なものにすることによって得られると信じて疑わなかった。溫柔敦厚の説はますます尊重された。当時の詩壇の領袖であった沈德潜も「詩の道たるや、以て性情を理め、倫物を善くし、鬼神に感じ、邦國を設教し、諸侯に應對すべし。」と述べ、溫柔敦厚の詩教を提唱している。彼は特に「忠を顯らかにして佞を斥け、君を愛して國を憂うれば、以て人道の窮するを持するに足る」というような社会的効用を持つ詩作を重んじている。これらの資料から見れば、蔣士銓の詩論は、自ずと沈德潜の説くような伝統的な詩教と深く繋がっていることが分かる。蔣士銓は曾て『香祖樓』の第十齣に、

萬物性含中、情見於外。男女之事乃情天中一件勾當。大凡五倫百行、皆起於情。有情者為忠臣、孝子、仁人、義士。無情者為亂臣、賊子、鄙夫、忍人。

蔣士銓『臨川夢』における湯顯祖像（王）

万物の性は中に含み、情は外にあらわる。男女の事は、すなわち情天中の一件の勾當なり。およそ五倫百行は、みな情より起り、有情の者は忠臣・孝子・仁人・義士となり、無情の者は乱臣・賊子・鄙夫・忍人となる。といい、さらに蔣士銓の『空谷香』に序文を書いた張三禮は、蔣士銓の作風を評して、

文字無關風教、雖炳耀藝林、膾炙人口、皆為苟作。

文字、風教に關することなくんば、芸林に炳耀し、人口に膾炙すといえども、みな苟作なり。

と述べている。ここから、やはり蔣士銓も溫柔敦厚の詩教を意識していることが分かる。また同時代の戯曲作家である夏綸の作品について、梁廷枏は『曲話』卷三に、

惺齋作曲皆主懲勸。常舉忠、孝、節、義、各撰一種。以『無瑕璧』言君臣、教忠也。以『杏花村』言父子、教孝也。以『瑞筠圖』言夫婦、教節也。以『廣寒梯』言師友、教義也。以『花萼吟』言兄弟、教悌也。

惺齋（夏綸）の作曲は、皆、懲勸を主とす。常に忠、孝、節、義をあげ、各々一種を撰す。『無瑕璧』を以て君臣を言ふは、忠を教えるなり。『杏花村』を以て父子を言ふは、孝を教えるなり。『瑞筠圖』を以て夫婦を言ふは、節を教えるなり。『廣寒梯』を以て師友を言ふは、義を教えるなり。『花萼吟』を以て兄弟を言ふは、悌を教えるなり。

と評して、夏綸がその伝奇の中で道德倫理を鼓吹したり、さらに因果応報の思想を通して勸善懲惡の考えを提唱していることを述べている。

以上のことから、当時の詩文学作品や「小道」と見なされた戯曲作品は、「宗經」「載道」という伝統的文学觀念を受け継ぐと共に、溫柔敦厚の伝統的な詩教から強い影響を受け、作品を創作する傾向が強く見られたことが言える。つまり伝統的な詩教は、清代中期に至って、文学作品、特に演劇の内容に大きな影響を及ぼし、それが乾隆期における演劇の發展にブレーキを掛けるどころか、かえって拍車を掛けたといってもよいだろう。

ここで注意を払わなければならないのは、当時の文人伝奇の作品における同時代を扱ったものや歴史劇の内容の多くに、忠臣と奸臣の争いを取り入れる傾向がしばしば見られるということである。忠奸鬭争を題材とする文人伝奇は、すでに明代から多く作られていた。たとえば、明代の李開先『寶劍記』、卜世臣『冬青記』、清代の李玉『牛

頭山』、丁耀亢『艸蛇胆』などがある。鮮明に政治の争いを描き出していることに、彼らの政治への高い関心が明示されている。田仲一成氏によると、明末になると、文人にとっては、戯曲はすでに娯楽の効用を越えて、大衆に自分の主張を表す強い宣伝手段の一つとなったという。⁽⁹⁾しかし清代の異民族政権、特に雍正・乾隆帝の時期に作られた忠奸闘争を主題とする文人伝奇は様相が違ってくる。異民族統治下の厳しい制限の下で、こういった内容の戯曲は政府への批判がますます薄くなり、かえって政治の思想や倫理強化としての役割を担い、忠勤を尽くすことを宣揚するようになる。現実の政治に向かぬ文人たちは、文学を借りて政治理念を提唱し、現実の政治制度を強固にしようとする意図を持っていたのではないだろうか。

終わりに

『臨川夢』における湯頭祖の「忠孝完人」の像は、ただ蔣士銓が自分の境遇を嘆くための代理人ではない。当時において道徳規範は、王朝に仕え、權威のみを求める功利主義の下にあまり重視されなくなり、その反動から蔣士銓は、忠臣のイメージを通して忠君の観念を復興すべきだと主張していることが分かる。こういった道徳感情が、再び新たな王朝の政治権力を擁護するためのものとして現れたことが推察できる。周知の通り、清朝は満洲人が建てた王朝であるが、漢民族の士大夫にとって、たとえ王朝が変わり、違う民族が統治者となっても「君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり」の理念は永遠に変わらないものであった。その考えは『臨川夢』に描き出された湯頭祖の姿によって確認することができる。

以上考察してきたことから、蔣士銓が自己の戯曲作品を載道主義・教化主義を基盤にして創作したことが分かる。更に蔣士銓が道徳体制・倫理思想を大いに鼓吹する理由も納得できるであろう。ところで、蔣士銓がこれほど懸命に倫理道徳を歌うというのは、一方で、彼が戯曲を通して任官運動をしているのではないかと疑わせる。この点については、当時編纂された『四庫全書』が大きく関わるであろう。一体、『四庫全書』の編纂は当時の文学創作に具体的にどんな影響を及ぼしたのだろうか。「四庫全書總目・目錄類」は「經籍之屬」と「金石之屬」の二つに分

けられる。その中の「經籍之屬」の庫書書目の項目に、明の朱睦㮮『授經圖』二十卷と清の朱彝尊『經義考』三百卷との二つの書目があり、この二つはいずれも經学に関わる書目である。この二つの書目の組み合わせは經学傳承の系統をよく現しているという。このことから、編纂者が經学傳承の系統といった専門目錄を「四庫全書總目・目錄類」にとりわけ目立たせていることが推測できる。このことはいったい何を意味するのだろうか。周彦文氏によると、そもそも『四庫全書』が編纂され始めた頃から、「大衆を教化する」意図はすでに濃厚であり、そのため作為的に經学という目錄を「四庫全書總目・目錄類」にとり挙げることで教化の働きの意味を持たせたのだという。⁽²⁵⁾そのため、このような清朝の教化政策の下で、当時の文学全体は自然に濃厚な教化や道德性を持つようになったことが考えられる。經学強調の立場から、道德や倫理を訓示するため、演劇も風化と關係を持ち、「勸善懲惡」を提唱する役割を果たすべきだと要求された。こういった背景の下で、道德体制、忠君忠勤、倫理思想といったものを鼓吹するようになった。これは、蔣士銓がこれほど倫理思想を宣伝しようとした理由について、一つのより合理的な説明になるであろう。

呉梅は『中國戲曲概論』巻五に、

自藏園標下筆關風化之旨、作者皆矜慎屬稿、無青衿挑達之事。

藏園（蔣士銓）筆を下して、風化に関わるの旨を標してより、作者は皆矜慎して稿を屬す。青衿挑達の事無し。と述べ、蔣士銓が、戯曲は風化に関わっていることを提唱して以後、男女間の情事という戯曲が忌避されて、戯曲作品には道德性がますます濃厚になってきたことを叙述している。社会秩序のみだれについて、作家たちの多くが危機意識を持つようになったのも事実である。蔣士銓の勸善懲惡の理念に基づいた倫理の強調には、そうした危機意識の一端が現れているのではないか。蔣士銓が生きた乾隆時代は、時代が降るにつれて崑曲が次第に衰えていき、次第に地方戯曲に取って代わられつつあった。⁽²⁶⁾こうした中で蔣士銓の戯曲は、崑曲の最後の耀きとなったといってもよいであろう。

- (1) 張敬氏の「藏園九種曲析論」の論文は『書日季刊』第九卷一九七五年第一期所収。熊澄宇氏『蔣士銓劇作研究』中国戯曲出版社、一九八八年。青木正兒氏『支那近世戯曲史』第十一章崑曲餘勢時代の戯曲(五)「蔣士銓の藏園九種」弘文堂、一九六七年参照。
- (2) 張敬氏前掲論文参照。
- (3) 青木氏前掲著三七五頁参照。
- (4) 「貧乏者救助之、非關貧富」(『湯顯祖集』付録、明・鄒迪光「臨川湯先生傳」中華書局、一九三六年)。
- (5) 「萬曆十一年癸未三月十八日庚子、以第三甲第二百十一名賜同進士出身」(徐朔方・『湯顯祖年譜』上海古籍出版社、一九八〇年)。
- (6) 「乾隆丁卯十二年(一七四七)舉人、授內閣中書、丁丑進士、改翰林庶吉士、散館取第一、授編修」(『乾隆南昌縣志』卷二十五)。
- (7) 「湯顯祖、臨川人。南儀郎。建言謫轉知遂昌縣。下車惟較文詩賦、而訟獄庶務、亦迎刃而解。」(『浙江通志』卷二十八、名臣三)。
- (8) 『牡丹亭還魂記』は万曆二十六年に出版、『南柯記』は万曆二十八年、『邯鄲記』は万曆二十九年に完成。
- (9) 「其所作還魂記傳奇、憑空結撰、汚蔑閨闈、內有陳齋長即指眉公、與唐元微之所著會真記、元王實甫演為西廂曲本、俱稱填詞絕唱。但口孽深重、罪干陰譴、昔有人游冥府、見阿鼻獄中拘繫二人甚苦楚、問為誰、鬼卒曰「此卽陽世所作還魂記、西廂記者、永不超生也。」宜哉。」(顧公燮『消夏閑記摘抄』卷下「陳眉公學問人品」)。
- (10) ロイド・E・イーストマン著、上田信・深尾葉子訳『中国の社会』、平凡社、一九九七年、第三章「民族宗教」参照。
- (11) 王利器氏輯『元明清三代禁毀小説戯曲史料』第三編「社會輿論」(上海古籍出版社、一九八一年)参照。
- (12) 臣謂皇上可惜者有四。爵祿者、皇上之雨露也、今乃為私門蔓桃李耳、其實公家之荆棘也。皇上之爵祿可惜、一也。若蔣士銓『臨川夢』における湯顯祖像(王)

群臣之風靡、皆知受輔臣恩、不知受皇上恩、豈復有人品在其中乎。皇上之人才可惜、二也。輔臣不破法與人富貴、不見為恩、皇上之法度可惜、三也。陛下經營天下二十年於茲矣、前十年之政、張居正剛而有欲、以群私人囂然壞之、後十年之政、時行柔而有欲、又以群私人靡然壞之。(『玉茗堂全集』文、卷十六。)

(13) 『玉茗堂全集』詩、卷二「平昌送何東白歸江山」の詩序参照。

(14) 『玉茗堂全集』文、卷七「遂昌縣滅虎祠」参照。

(15) 花縣について、『庾子山集』卷一「春賦」に「河陽一縣併是花」とあり、また『玉茗堂全集』詩、卷十五「丙申平昌戲贈勾芒神」に「也知欲去河陽宰、爲與催花一蚤鞭。」とある。晉の人潘岳は河陽令たる時、県内の至る所に花を植え、民の生活は豊で、そのために河陽は花縣と呼ばれていたという。湯頭祖はこの治績に憧れ、これを理想として徐聞縣や遂昌縣を治めたことを指す。

(16) 鄒迪光「臨川湯先生傳」参照。

(17) 郭英德氏「明清文人傳奇的歴史演進」(『文学遺産』一九九〇年)。

(18) 「忠孝義烈之心、溫柔敦厚之旨」(『忠雅堂文集』卷一「鍾叔梧秀才詩序」)。

(19) 「詩上通乎道德、下止乎禮義」(『忠雅堂文集』卷一「邊隨園詩序」引王半山「詩解序」)。

(20) 「詩之為用、微之可以格鬼神而享天祖、顯之可以移風俗而厚人倫、雅頌得所、人心和平、則天地道通」(『忠雅堂文集』卷一「胡秀才簡麓詩序」)。

(21) 船津富彦氏「清初詩話に表れた「溫柔敦厚詩教也」について」(『明清文学論』汲古書院、一九九三年)。

(22) 『說詩碎語』。

(23) 「顯忠斥佞、愛君憂國、足以持人道之窮。」(『同書』卷二)。

(24) 田仲一成氏『中国演劇史』、東京大学出版会、一九九八年、三一五頁。

(25) 周彦文氏「四庫全書總目・目錄類論述」参照。

(26) 「兩淮鹽務、例蕃花雅兩部以備大戲。雅部即崑山腔、花部爲京腔、弋陽腔、梆子腔、羅羅腔、二簧調。統謂之亂彈。」(清・李斗『揚州畫舫錄』卷五)。